

18 歳市民力の育成を目指した中学校における地理学習
～フードバンクの役割と課題に着目してアメリカ合衆国の生活様式を考える～

- 1 校種・教科・科目（分野） 中学校・社会科・地理的分野
- 2 単元名 北アメリカ州
- 3 学習指導要領上の位置付け B（2）世界の諸地域
- 4 カリキュラムマップとの関連性 市民の権利と責任 人間と環境の調和

5 単元目標

知識・技能	思考・判断・表現	学びに向かう力・人間性
北アメリカ州の自然環境、民族、諸産業、文化などの地域的特色について、教科書や地図帳等を活用し、理解できる。	アメリカ合衆国の大量生産・大量消費の生活様式の影響について、諸資料から読み取った情報をもとに多面的・多角的に考察できる。	フードバンクの役割と課題を多面的・多角的に考察することを通して、大量生産・大量消費の生活様式への自らの意見を構想できる。

6 単元の特色（教材観）

本単元は、平成 29 年告示中学校学習指導要領第 2 章第 2 節社会の地理的分野「B 世界の様々な地域」の「(2) 世界の諸地域」に位置付いている。この中項目は、世界の諸地域の基礎的・基本的な知識を定着させるという観点から、「①アジア」、「②ヨーロッパ」、「③アフリカ」、「④北アメリカ」、「⑤南アメリカ」、「⑥オセアニア」の 6 つの州からなる小項目で構成されている。この中項目の主なねらいは、同解説において、「空間的相互依存作用や地域などに関わる視点に着目して、世界の各地域で見られる地球的課題の要因や影響をその地域的特色と関連付けて多面的・多角的に考察し、表現する力を育成する」とともに、「世界の各州の地域的特色やそこで見られる地球的課題と地域的特色の関係を理解できるようにすること」と記されている。また、この中項目で取り上げる「地球的課題」については、同解説において、「グローバル化する国際社会において、人類全体で取り組まなければならない課題、例えば、持続可能な開発目標（SDGs）などに示された課題のうちから、生徒が地理的な事象として捉えやすい地球環境問題や資源・エネルギー問題、人口・食料問題、居住・都市問題などに関わる課題」と記されている。以上のことから、本単元では、「北アメリカ州」における地球的課題として、「大量生産・大量消費の生活様式がもたらした環境問題・食料問題」を取り上げ、その要因と影響について、北アメリカ州の地域的特色や、フードバンクと関連付けながら多面的・多角的に考察し、表現する力を身に付けさせることを目標とする。

本単元においてフードバンクを教材として取り上げた理由は、次の 2 つである。

第一は、フードバンクの世界的な広がりである。フードバンクとは、日本の農林水産省の定義によると、「食品工業の製造工程で発生する規格外品などを引き取り、福祉施設等へ無料で提供する活動」である。1967 年にアメリカ合衆国で設立されて以来、1984

年にはフランス、1998年には韓国でも設立され、日本においても、2002年にセカンドハーベスト・ジャパンによる取り組みが始まっている。また、近年では、2015年に国連総会で採択された「持続可能な開発のための2030年アジェンダ」をきっかけに食品ロス削減の機運が高まり、まだ食べられるにも関わらず廃棄されてしまう食品、いわゆる食品ロスを削減するための有効な手段として、フードバンクは世界中から注目されている。このことから、フードバンクを取り上げることで、生徒にとって次の2つの効果が期待される。1点目は、「環境問題や食料問題」、特に「食品ロス」が地球上の各地で現れている普遍的な課題であると認識しやすくなる点である。2点目は、「こども食堂（無料または安価で栄養のある食事や温かな団らんを提供する場所）」や「フードパントリー（食品支援が必要な時に誰でも食品が受け取れる場所）」などの日本国内で行われている活動と関連付け、「環境問題や食料問題」の要因・影響・対処の方法について、身近な生活経験と結び付けてイメージしやすくなる点である。

第二は、フードバンクが果たす役割と抱えている課題である。フードバンクは、アメリカ合衆国で生活困窮者対象の無料食堂でボランティアをしていたヴァンヘンゲル氏が1967年に創設したとされている。ヴァンヘンゲル氏は、まだ食べられるにも関わらず商品価値のなくなった食料が捨てられていることを知り、店から食料を譲り受け、教会の倉庫に保管し、福祉団体に支給するという事業を始め、この取り組みが現在のフードバンク活動の基礎となっている。フードバンクが果たす機能について、日本の農林水産省は、「食品ロスの廃棄による無駄をなくし、資源の有効利用を目的とする経済・環境的な機能と、全ての人に食べ物を供給したいという社会福祉的な機能をもつ」と分析している。すなわち、フードバンクは、食品ロス削減という環境政策的側面と、全ての人への食料供給という社会政策的側面の両面で意義を持つ活動と言える。一方、「フードバンクの受益者には生活困窮者以外も含まれ、社会福祉的な側面としては十分に評価されない」、「寄付される食品に偏りがあり、栄養価という観点からフードバンクは食料供給の役割を十分に果たしていない」、「地域社会の食料不安に対する効果的な対応を抑制する」などの批判もあり、世界を見渡すと、必ずしも好意的に受け止められているわけではない。このことから、フードバンクを取り上げることで、生徒にとって次の2つの効果が期待される。1点目は、食品ロス削減や生活困窮者への食料供給の方法について、具体的なイメージを持ちながら理解を深められる点である。2点目は、フードバンクが抱える課題を考えることを通して、「環境問題や食料問題」の解決策は、多面的・多角的に検討しなければならないと認識できる点である。

以上のことを踏まえ、本單元では、北アメリカ州で見られる地球的課題を「大量生産・大量消費の生活様式がもたらした環境問題や食料問題」と設定し、フードバンクに着目し、その要因と影響について、北アメリカ州の地域的特色と関連付けながら多面的・多角的に考察し、表現する力を身に付けさせる授業を構想していく。

7 単元計画

時	ねらい	学習活動
第1時	北アメリカ州の地形や気候を調べ、異なる自然環境での多様な生活を捉える。	○地図帳を活用して北アメリカ州の地名を調べる。 ○雨温図を読み取り、北アメリカ州の各地域の気候と生活の様子を理解する。
第2時	北アメリカ州の民族について、移民の歴史という観点から理解する。	○統計と民族構成のグラフより、北アメリカ州における各民族の割合とその分布を読み取り、移民の歴史について理解する。
第3時	北アメリカ州の農業について、世界の食料庫という観点から説明する。	○統計より北アメリカ州の農産物を読み取り、自然環境や歴史的事実と関連付け、世界の食料庫としての特色を説明する。
第4時	北アメリカ州の工業について、自動車や ICT 技術の発展に着目して理解する。	○統計より北アメリカ州における鉱産資源・工業製品を読み取り、北アメリカ州の自然環境や歴史的事実と関連付け、各工業の発展の背景を説明する。
第5時 (本時)	アメリカ合衆国の大量生産・大量消費の生活様式が与えた影響について、フードバンクの役割と課題に着目して、多面的・多角的に考察する。	○フードバンク誕生の背景について、アメリカ合衆国の生活様式や歴史的事実と関連付けて理解する。 ○北アメリカ州が抱える「環境問題・食料問題」について、フードバンクの役割と課題に着目して、意欲的に追究する。

8 カリキュラムマネジメント

本単元は、小学校社会科・中学校社会科公民的分野・高等学校公共と関連している。

第一は、小学校社会科であり、本単元は、平成 29 年告示小学校社会科学習指導要領第 2 章第 2 節社会の第 4 学年の「(2) 人々の健康や生活環境を支える事業についての学習」における「廃棄物を処理する事業に関する内容」と関連している。この内容では、廃棄物を処理する事業は、衛生的な処理や資源の有効利用ができるよう進められていることや、生活環境の維持と向上に役立っていることを理解できるようにすることが主なねらいとされている。このことから、小学校社会科では、次の 2 点を既習事項として身に付けていると考えられる。1 点目は、日常生活において大量で多様な廃棄物が排出される中で、廃棄物を処理する事業は、長い年月をかけて地域の生活環境に配慮しながら廃棄物を安全かつ衛生的に処理する仕組みを構築してきたことである。2 点目は、廃棄物を処理する事業が工夫を積み重ねてきた結果、地域の公衆衛生が向上し、人々の生活環境が維持・向上してきたことである。そこで、本単元では、小学校社会科での学習を受け、大量廃棄の問題の背景には、大量生産・大量消費の生活様式が関係していることに気付かせ、食料廃棄物の処理が地域のつながりの中で実現できることに対して興味・関心を抱かせ、主体的に学びに向かう姿勢を喚起していく。

第二は、中学校公民的分野であり、本単元は、平成 29 年告示中学校学習指導要領第 2 章第 2 節社会の公民的分野「B 私たちと経済」の「(2) 国民の生活と政府の役割」と関連している。この中項目では、国民の生活と福祉を向上させる上で市場の働きに委ねることが難しい諸問題を追究・解決する活動を通して、国民の生活と政府の役割について関心を高めることが主なねらいとされている。このことから、公民的分野では、次の 2 点を理解することが目指されていると推察される。1 点目は、日本国憲法第

25 条の精神に基づく社会保障制度の基本的な内容の理解をもとに、政府がその充実と安定化を図らなければならないことである。2 点目は、社会保障の充実・安定化には、財政の現状や少子高齢社会など現代社会の特色などを踏まえながら、自助・共助・公助が最も適切に組み合わせられるように留意しなければならないと求められていることである。そこで、本単元では、公民的分野での学習に向けて、国民の生活環境と福祉の向上を支える条件について、地理的な条件に着目して考察する力を身につけさせていく。

第三は、高等学校「公共」であり、本単元は、平成 30 年告示高等学校学習指導要領第 2 章第 3 節公民の「公共」の「B 自立した主体としてよりよい社会の形成に参画する私たち」の「(3) 主として経済に関わる事項」の「財政及び租税の役割、少子高齢社会における社会保障の充実・安定化」と関連している。この事項では、公正かつ自由な経済活動を行うことを通して資源の効率的な配分が図られること、市場経済システムを機能させたり国民福祉の向上に寄与したりする役割を政府などが担っていること及びより活発な経済活動と個人の尊重とを共に成り立たせることが必要であることについて理解できるようにすることを主なねらいとしている。また、「財政及び租税の役割、少子高齢社会における社会保障の充実・安定化」では、主題を追究・解決する活動において、「…生活上直面する様々なリスクに対しては、自分でそれに備えたり、対処したりするだけではなく、近隣住民などと互いに助け合うことや行政による対応が欠かせないことなどの観点から、自助、共助及び公助が最も適切に組み合わせられるようにするにはどうすればよいか多面的・多角的に考察、構想し、表現できるようにすること」と記されている。そこで、本単元では、高等学校「公共」での学習に向けて、大量生産・大量消費の生産様式がもたらす環境問題・食料問題について、自助・共助・公助の視点から捉え、多面的・多角的に考察し、表現できる力を身につけさせていく。

9 本時の授業展開（第 5 時）

(1) 本時の目標

アメリカ合衆国の大量生産・大量消費の生活様式が与えた影響について、フードバンクの役割と課題に着目して、多面的・多角的に考察する。

(2) 本時の展開

段階	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準
導入	<ul style="list-style-type: none"> ・資料 1 「無料で配布される食料をもらうために行列を作る人々」の写真を見て、人々が並ぶ理由を考える。 【予想される生徒の回答】 <input type="checkbox"/>生活が苦しいから。 <input type="checkbox"/>無料で食料がもらえるから。 ・アメリカ合衆国では無料で食料を提供するフードバンクという活動が展開されていることを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・なぜアメリカ合衆国の人々は行列を作っているのか」と発問する。 ・資料 1 がアメリカ合衆国最大の都市の 1 つであるニューヨーク市で撮影された写真であると補足する。 ・アメリカ合衆国の約 4500 万人が食料不安に陥り、近年では、「フードバンク」を利用している人々が増えている現状を補足説明する。 	

<p>展開 I</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・資料2「フードバンク誕生物語」を読み、フードバンクが設立したきっかけを知るとともに、フードバンクが生産や販売の過程で生じる無駄を利用して食料供給のシステムを構築していることを理解する。 ・資料3「アメリカ合衆国の飢餓の状況」より、アメリカ合衆国において食料不安に陥っている地域について、資料3の分布図から読み取った情報と、アメリカ合衆国における移民や諸産業の発展の歴史と関連付けてその背景とともに理解を深める。 ・フードバンクが食品ロス削減という環境政策的側面と、生活困窮者への食料供給という社会政策的側面の両面で意義を持っていることを理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「フードバンクはどのような仕組みで成り立っているのか」と発問する。 ・フードバンクが「企業や個人から食料の寄付を受け、倉庫などに保管し、福祉団体などを通して食料の配給を行っている」ということを説明する。 ・「フードバンクはどこ地域で広がっているのか」と発問する。 ・ミシシッピ州などかつて綿花のプランテーションが行われていた南部や、ミシガン州などのかつて自動車工業が盛んだった北東部を中心に飢餓が急増していることを補足する。 ・「フードバンクが果たしている役割とは何か」と発問する。 ・フードバンクが果たしている環境政策・社会政策的な役割を補足する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大量生産・大量消費の生活様式の影響について、諸資料から読み取った情報をもとに多面的・多角的に考察できたか。 ・フードバンクが果たしている役割について、多面的・多角的に考察できたか。
<p>展開 II</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・資料4「フードバンクが腹ペコになった」より、フードバンクが大量生産・大量消費の生活様式によって生じた無駄を活用していると気付く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・資料4「フードバンクが腹ペコになった」を示し、大量生産・大量消費の生活様式とフードバンクの課題との関連性に気付かせる。 	
<p>展開 II</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・フードバンクが抱えている課題について考察する。 ・4人1組のグループを作り、フードバンクが抱える課題に関する意見交換を行い、グループで1つの意見にまとめる。 <p>【予想される生徒の回答】</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/>大量生産・大量消費の生活様式が変わるとフードバンクが成り立たない。 <input type="checkbox"/>フードバンクに依存して働こうとしない人が出てくる。 <input type="checkbox"/>生活困窮者以外の人も集まるようになり、生活困窮者に届かなくなる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「フードバンクが抱えている課題とは何か」を発問する。 ・フードバンクの活動が展開されることによって生じる課題のうち、最も影響が強いものをグループで考えるように促す。 ・各グループから発表されたフードバンクの課題について、自助・共助・公助という言葉を用いて分類し、その結果を生徒に示しながらフードバンクがもたらす影響が多様な視点で捉えられることを伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・フードバンクが抱えている課題について、多面的・多角的に考察できたか。
<p>まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・フードバンクが果たしている役割と抱えている課題に着目して、アメリカ合衆国の大量生産・大量消費の生活様式がもたらした影響について、自らの意見を記述する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大量生産・大量消費の生活様式の中でフードバンクが果たしている役割と、フードバンクがもたらしている新たな課題を踏まえて記述するように伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・フードバンクに着目し、大量生産・大量消費の生活様式に対する自らの意見を構想できたか。

(3) 本時で使用した資料

ア 資料1 「無料で配布される食料をもらうために行列を作る人々」



左写真：カサンドラ・スプラトリング「コロナ禍の米国 空腹と闘う」『ナショナルジオグラフィック』第27巻,第8号,2021年7月31日,pp.74-75

右写真：CNN「フードバンクの食品配布に車数千台が行列、新型コロナで困窮」

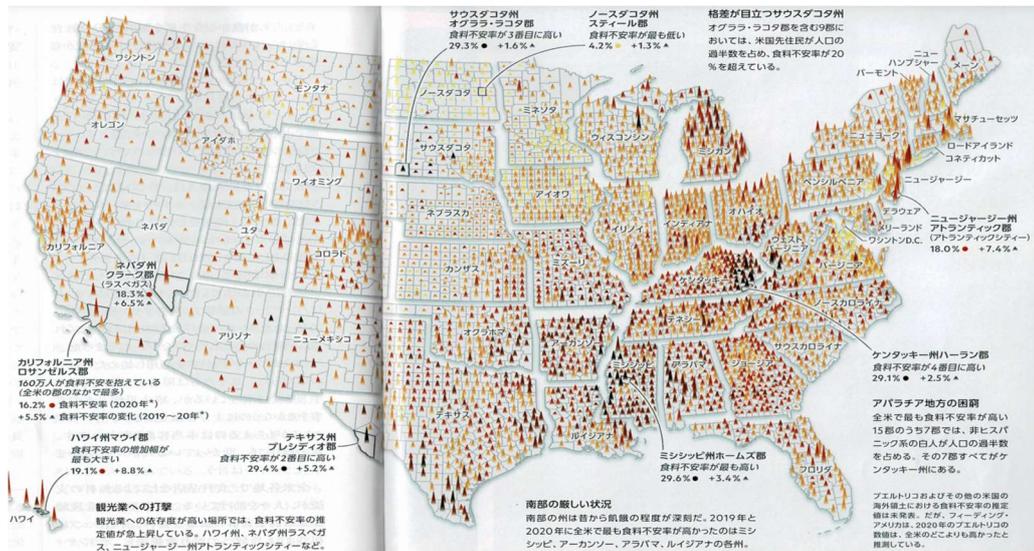
<<https://www.cnn.co.jp/usa/35162512.html>> (2022年8月10日閲覧)

イ 資料2 「フードバンク誕生物語」

ヴァンヘンゲルは、生活に苦しむ人々のための食堂でボランティアをしていると、1人のシングルマザーと出会った。ヴァンヘンゲルが「育ち盛りの子どもに十分な食事を与えるのは大変だろう」と尋ねると、その女性は「スーパーのゴミ箱を探すと、食べられるものが捨てられている」と答え、「ただ、ゴミ箱から拾うことには少し抵抗がある。捨てずに別のところに置いてくれれば…」と語った。早速、ヴァンヘンゲルはスーパーのゴミ箱を調べると、凍ったままの冷凍食品や硬くなりかけた食パンなどまだ食べられる食品がたくさんあった。「食べられるけれど売れない食品。捨てるくらいだったら寄付してほしい」と店長を説得し、寄付してもらった食品は地元の教会の倉庫に運び込んだ。

出典：大原悦子『フードバンクという挑戦—貧困と飽食のあいだで』岩波書店,2016, pp.31-32

ウ 資料3 「アメリカ合衆国の飢餓の状況」



出典：カサンドラ・スプラトリング「コロナ禍の米国 空腹と闘う」『ナショナルジオグラフィック』第27巻,第8号,2021年7月31日,pp.86-87

エ 資料4 「フードバンクが腹ペコになった」

食品会社やスーパーなどが消費者の要求を正確に把握できるようになり、売れ残りや返品がなくなるとともに、技術の進歩によってラベルの印刷ミスも少なくなり、さらにワケあり商品を低価格で売る店舗も出現し、フードバンクへの食品の寄付が減ってきた。

出典：大原悦子『フードバンクという挑戦—貧困と飽食のあいだで』岩波書店, 2016, pp. 62-63

10 生徒の学習成果とその評価

(1) 単元評価規準及びルーブリック評価基準

	知識・技能	思考・判断・表現	学びに向かう力・人間性
A	北アメリカ州の自然環境、民族、諸産業、文化等の地域的特色について、教科書や地図帳等を活用して理解を深めている。	アメリカ合衆国の大量生産・大量消費の生活様式の影響について、諸資料から読み取った情報をもとに多面的・多角的に考察している。	フードバンクの役割と課題を多面的・多角的に考察し、大量生産・大量消費の生活様式への自らの意見を構想している。
B	北アメリカ州の自然環境、民族、諸産業、文化などの地域的特色について、教科書を活用して理解を深めている。	アメリカ合衆国の大量生産・大量消費の生活様式の影響について、身近な生活経験から多面的・多角的に考察している。	フードバンクの役割もしくは課題を考察し、大量生産・大量消費の生活様式への自らの意見を構想している。
C	北アメリカ州の自然環境、民族、諸産業、文化などの地域的特色について、十分に理解を深めていない。	アメリカ合衆国の大量生産・大量消費の生活様式の影響について、多面的・多角的に考察していない。	フードバンクの役割もしくは課題の考察が不十分で、大量生産・大量消費の生活様式への自らの意見も構想していない。

(2) 本実践の成果

本実践の成果は次の2点である。1点目は、フードバンクが果たしている役割について、「アメリカ合衆国の飢餓の状況」から読み取った情報と、北アメリカ州の移民や諸産業の発展の歴史と関連付けて理解を深めることができた点である。本実践では、展開Ⅰにおいて、「フードバンクが果たしている役割とは何か」に対する自らの考えを記述する活動を設定した。そこでは、「大量生産・大量消費が生み出した大量の食品廃棄物を利用して食料供給を行うことによって、ヒスパニックやアフリカ系移民など低賃金で生活が苦しんでいる南部の人々の生活を支えている」、「まだ食べられるけど売れない食品を有効に活用し、かつて綿花のプランテーションが広がっていた地域や自動車工業で発展していた五大湖周辺の地域で生活に苦しんでいる人々を助けている」などの記述が見られた。これらの記述から、多くの生徒が「フードバンクの役割」について、アメリカ合衆国の飢餓の分布図と北アメリカ州の地域的特色を結び付けて理解している様子が伺えた。このように、地球的課題である「環境問題・食料問題」に

関する社会的事象について、北アメリカ州の地域的特色を結び付けて理解することは、平成 29 年告示中学校学習指導要領でも示されている「世界各地に見られる地球的課題は地球上の各地で現れる普遍的な課題ではあるが、各地域の地域的特色を反映させてその要因や影響、対処の仕方などが異なっている」ことを捉える力を身に付けさせる上で効果的であったと言える。

2 点目は、フードバンクが抱えている課題について、自助・共助・公助といった多様な視点で捉えられることができた点である。なお、本実践において、自助・共助・公助については、生活上直面する様々なリスクに対して、自分でそれに備えたり、対処することを自助、地域住民などと互いに助け合って対応することを共助、国や地方自治体などの行政によって対応することを公助と捉えた。本実践では、展開Ⅱにおいて、「フードバンクが抱えている課題とは何か」に対する自らの考えを記述し、4 人 1 組のグループで、各個人の意見を交換し、グループで 1 つの意見にまとめる活動を設定した。生徒の回答を自助・共助・公助に分類してみると、自助に関する記述をした生徒は 126 人中 48 人で全体の 38%、共助に関する記述をした生徒は 126 人中 73 人で全体の 58%、公助に関する記述をした生徒は 126 人中 5 人で全体の 4% を占めていた。まず、自助については、次の 2 つのような記述が見られた。1 つ目は、「フードバンクに頼ってばかりの人が生まれ、『生活のために働こう』という人がいなくなってしまうおそれがある」、2 つ目は、「企業の中にも『たとえ売れ残ってもフードバンクに寄付すれば廃棄に関するコストが削減できる』と考える企業が出てきてしまい、『無駄をなくそう』と努力する意欲を低下させてしまう」などの個人や企業の活動に着目した記述である。次に、共助については、次の 2 つのような記述が見られた。1 つ目は、「フードバンク利用者の増加に伴い、フードバンクの品揃えに対して苦情を言う利用者が増え、『廃棄食品を寄付してもらい、それらを生活に苦しむ人に提供する』という助け合いの図式が崩れてしまう」、2 つ目は、「フードバンクの利用者増加→スーパーで買い物をする人の減少→売れ残りの増加→フードバンクの寄付の増加→利用者の増加…という循環が生まれ、スーパーがつぶれてしまう。」などフードバンクの利用者同士の協力や販売者と消費者の関係に着目した記述である。最後に、公助については、次の 2 つのような記述が見られた。1 つ目は、「フードバンクが十分に機能してしまうと、生活に苦しむ人を助ける役割を担うはずの国が十分な政策を行わなくなってしまう」、2 つ目は、「フードバンクの利用者が増えると、買い物のときに集められるはずの税金が十分に集められなくなり、その結果、生活に苦しむ人を支援するための財源が足りなくなってしまう」など公的な機関の役割に着目した記述である。また、グループでの意見交換をする中で、次のような意見を持つようになった生徒もいた。1 つ目は、「公的な機関の支援にも限界があるから、結局はフードバンクに助けをもらいながらも自分たちで生活する力を身につけないといけないのではないか」であり、公助よりも自助あるいは共助の方が必要だと考えるようになった生徒がいた。2 つ目は、「生活が苦しいと、どうしてもフードバンクに頼ってしまい、フードバンクの品揃えに苦情を言いたくなる。そもそも生活困窮者が自立できるようなシステムが大切だと思う」であり、自助だけでは苦しい生活から抜け出すことが難しく、生活困窮者を救うシステムの整備が大切だと考えるようになった生徒もいた。これらのことから、多くの生徒が「フードバンク

の課題」について、自助、共助、公助といった多様な視点から多面的・多角的に捉えることができた様子が伺えた。このような活動は、中学校公民的分野や高等学校「公共」で求められている「生活上直面する様々なリスクに対して…自助、共助、公助が最も適切に組み合わされるようにするにはどうすればよいか多面的・多角的に考察、構想し、表現する」力を身に付けさせる上で有効であったと考えられる。

以上のことから、本実践は、中学校公民的分野や高等学校「公共」での学習に向けて、世界全体で見られる地球的課題の要因について、各地域の地理的な条件に着目して考察する力を身に付けさせる上で効果的であったと言える。また、地球的課題がもたらす影響について、自助・共助・公助などの多様な視点から捉え、多面的・多角的に考察し、構想し、表現する力を身に付けさせる上でも有効であったと考えられる。

11 「18歳市民力」育成に向けての提案

本実践を通して、18歳市民力の育成に向けた社会科・公民科授業を実現していくためには2つの視点が必要だと考えた。1点目は、小学校・中学校・高等学校へと進んでいく中で、世界各地で見られる普遍的な地球的課題は、各地域の地域的特色を反映させてその要因や影響、対処の仕方などが異なっていると理解できるように授業を構想していく点である。2点目は、小学校・中学校・高等学校へと進んでいく中で、社会的事象を捉える視点が多様になり、深まっていくように授業を構想していく必要があるという点である。本実践では、「環境問題や食料問題」を捉える教材として「フードバンク」を取り上げた。この教材は「生活環境の維持・向上」という点で小学校から高等学校までを貫くことができる。すなわち、小学校では、日本における生活環境の維持・向上の方法（「日本ではどのように廃棄物を処理あるいは有効に活用して生活環境を維持・向上しているのか」）、中学校では世界における生活環境の維持・向上の方法（「世界ではどのような手段で生活環境を整えていて、日本とはどのような点で異なっているのか」）、高等学校では世界と日本の生活環境の維持・向上のあり方（「日本と世界の生活環境の維持・向上への考え方はどのように違うのか」）について、理解を深めていくことになる。また、小学校では、「個人や企業がどのような工夫をすれば生活環境の維持・向上は実現できるか」という自助・共助の視点、中学校地理的分野では「どのような地域的つながりを生かして生活環境の維持・向上を実現しているのか」という共助の視点、公民的分野では「生活環境の維持・向上にはどのように公的な機関が関わっているのか」という公助の視点を身に付け、高等学校では、これまで学んだ自助、共助、公助の視点をもとに、それぞれのバランスを考えた政策を構想していく。このように、学校段階が上がるにつれて、学習内容や視点の幅を広げることが、社会的事象を多面的・多角的に捉えて判断する力を育成することにつながると考えられる。世界で起こっている事象には、一見すると同じように見える事象でも、各地域の地域的特色を反映させてその要因や影響が異なり、その捉え方も多様であることが多い。それを認識する力こそが18歳市民力にとって必要であり、そのような力を小学校、中学校、高等学校で系統的に育成することが、これからの社会科・公民科授業に必要なと言える。

参考 Web サイト

- ・農林水産省「フードバンク」

<https://www.maff.go.jp/j/shokusan/recycle/syoku_loss/foodbank.html> (2022年8月10日閲覧)

- ・農林水産省「子供食堂と連携した地域における食育の推進」

<<https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/kodomosyokudo.html>> (2022年8月10日閲覧)

- ・セカンドハーベスト・ジャパン「Activity Report」

<<https://2hj.org/report/4349/>> (2022年8月10日閲覧)

- ・CNN「フードバンクの食品配布に車数千台が行列、新型コロナで困窮」

<<https://www.cnn.co.jp/usa/35162512.html>> (2022年8月10日閲覧)

参考文献

- ・カサンドラ・スプラトリング「コロナ禍の米国 空腹と闘う」『ナショナルジオグラフィック』第27巻, 第8号, 2021年7月31日, pp. 74-97
- ・大原悦子『フードバンクという挑戦—貧困と飽食のあいだで』岩波書店, 2016
- ・佐藤順子『フードバンクー—世界と日本の困窮者支援と食品ロス対策』明石書店, 2018
- ・小林富雄・野見山敏雄『フードバンクの多様性とサプライチェーンの進化—食品寄付の海外動向と日本における課題』筑波書房, 2019

森賢士 (八王子市立松が谷中学校)